

郭巨図攷

——吳強華氏蔵北魏石床脚部の孝子伝図について——

黒田 彰

〔抄録〕

これまでに存在の確認される孝子伝図については、拙著『孝子伝の研究』Ⅱなどで紹介して来た通りであるが近時、中国科学院考古研究所、趙超教授の教示により、深圳の吳強華氏が従来、全く報告されたことのない、新出の孝子伝図を蒐集されていることを、知るに至った。吳氏所蔵の北魏石床の孝子伝図に関しては、近く中国において拙稿が公刊される。ここに紹介するのは、吳氏所蔵のもう一つの北魏石床脚部に描かれた、孝子伝図——郭巨図である。その図像は、かねて知られるいずれの郭巨図に比し

ても、最も完整なものと考えられ、加えて、その様式が寧夏固原北魏墓漆棺画と共通することなど、当脚部の有する学術的な価値は、非常に高いものである。吳氏のお許しを得て、日本において始めて、当脚部の郭巨図の全貌を、拓本によって紹介する。

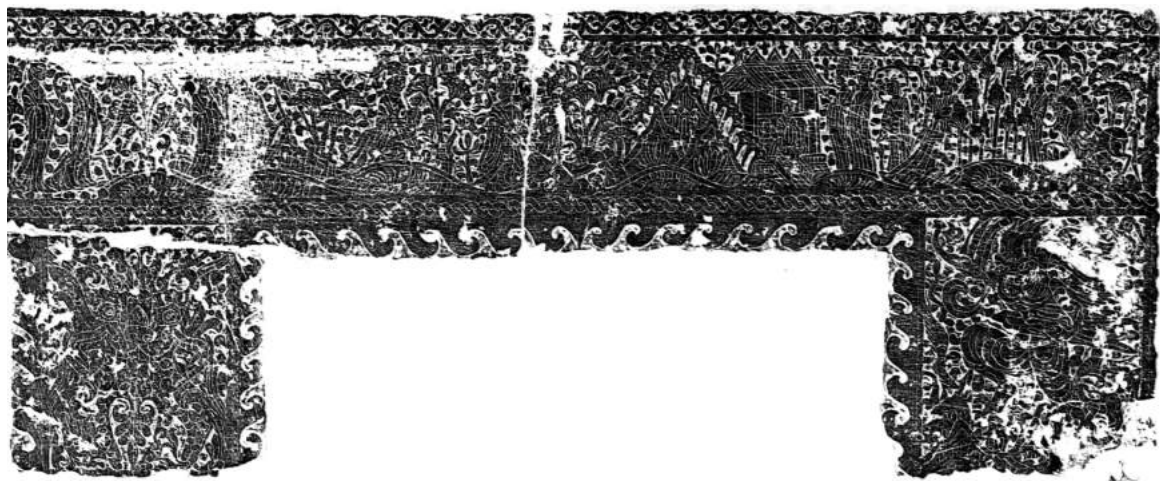
キーワード 孝子伝図、郭巨図、北魏石床脚部、寧夏固原

北魏墓漆棺画

一

近年、孝子伝図の蒐集に努めて来たが、新たな孝子伝図と廻り会うことは、極めて稀である。例えば二十四孝図の陸続として出土することと比べ、孝子伝図のそれは、何年かに一度を数えられれば、増しとしなければならぬ程、珍しいことである。ところが、一昨年、中国

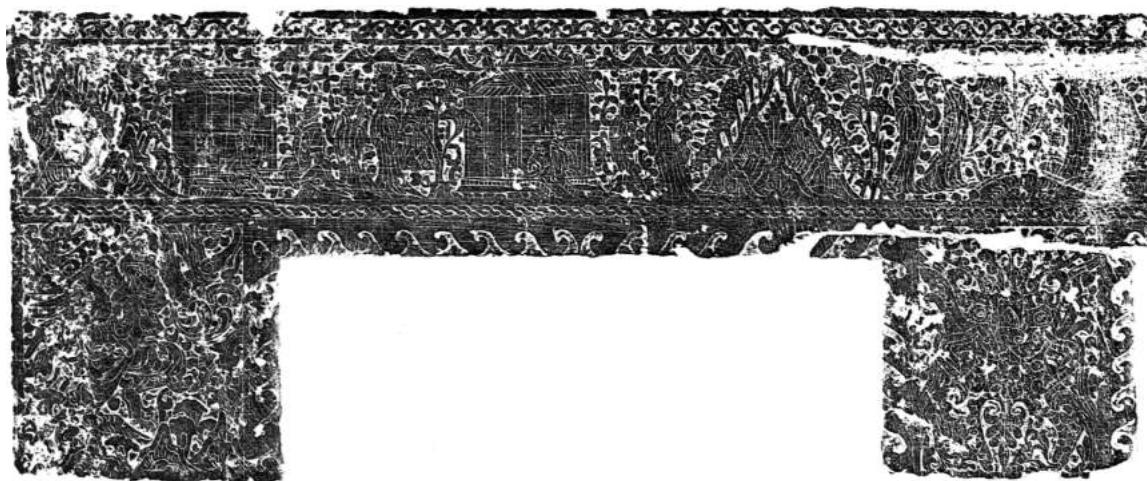
社会科学院考古研究所、趙超教授の教示により、深圳の吳強華氏が、孝子伝図を描いた新たな北魏石床を、所蔵されていることを知って、嬉しい驚きに打たれたことである。さらに吳氏から、その孝子伝図の解説を御依頼頂いたことは、私にとって光栄この上ないことであった。そこで、昨年及び、今年の三月、吳氏に特にお願ひして、深圳において件の北魏石床を見せて頂くことが出来た。新出の孝子伝図というだ



図一 呉強華氏蔵北魏石床脚部

けで、十分に珍しいが、私を驚嘆させたのは、その一図がまた、孝子伝図の中でも珍しい、董黯図に外ならなかったことである。しかし、私の驚きは、そこで終わった訳ではない。呉氏がその石床のみならず、もう一点の孝子伝図の描かれた、新たな北魏石床脚部を所蔵されていること、加えて、呉氏は、さらにもう一点の孝子伝図石床も、入手を予定されている旨を何うに及び（呉氏は、その写真を何枚も見せて下さった）、私は文字通り、仰天した。私の生涯において、新出の孝子伝遺品三点を、一時に眼にするなどということは、再びあるとは思えなかつたからである。呉氏の孝子伝図と私の出会いは、かく研究者冥利に尽きるものであり、その驚きを忘れることはないだろう。

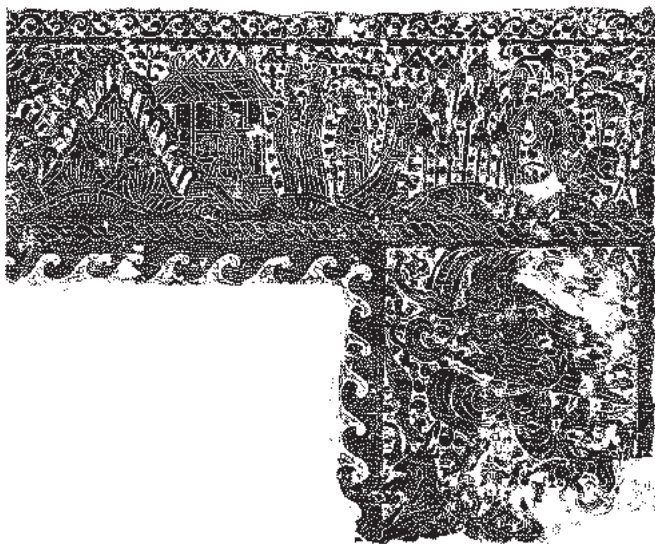
小稿で報告しようとするのは、その三点の内の二点目に当たる、呉氏所蔵の新出、北魏石床脚部の孝子伝図のことである。図一は、呉氏所蔵の拓本によって、その全体を示したものである。^② 図一の北魏石床脚部の孝子伝図は、幾つかの目立つ特色を持っている。まず、孝子伝図は石室、石棺、石床囲屏など、様々なものに描かれるが、石床脚部の上欄に描かれた孝子伝図というのは、極めて珍しく、これまで管見に入つた例がない。^③ 孝子伝図は通常、石床の囲屏部に描かれることが多く、石床の脚部に描かれたそれは、図一を初見とし、その点で、本遺品は、非常に貴重なものとすべきである。次に、図一の上欄に描かれた、孝子伝図は後述、三角形の山型で区切られた、三つの場面から成っているが、その内容は、全て郭巨図によって占められている。即ち、図一のそれは、全体が郭巨図を表わすのである。このように、一遺品の孝子伝図全体を、郭巨図が占めていることも、大変珍しい。そ



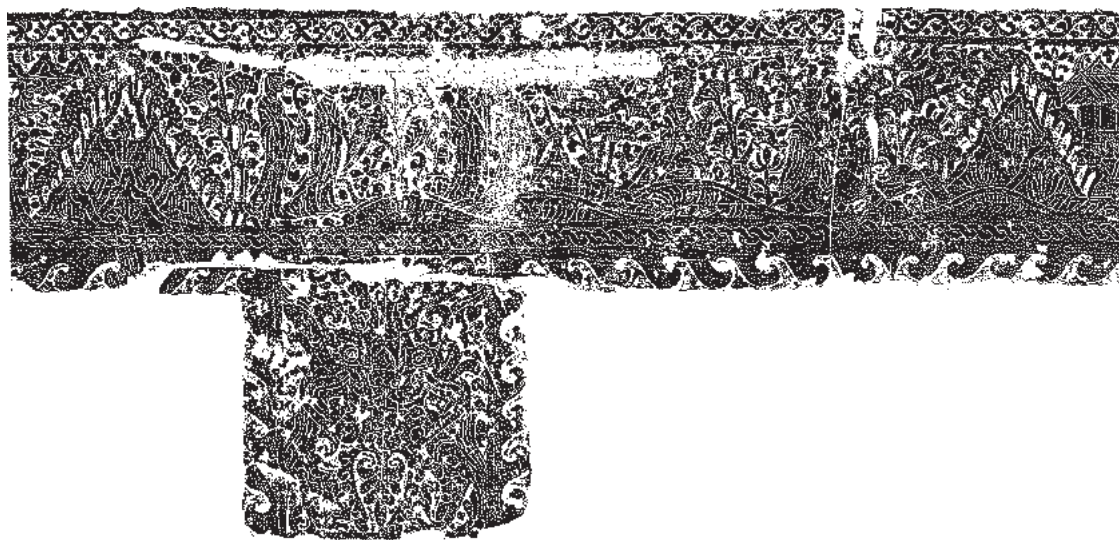
には、はっきりとした制作者の意図が認められるであろう。第三に、本遺品が前述、極めて特徴的な三角形の山型を、場面の区切りとして用いていることが上げられる。そして、興味深いことに、この特徴的な区切りを共有する、もう一点の孝子伝図遺品が、現存するのである。それが固原博物館蔵、寧夏固原北魏墓漆棺画に外ならない。このことは後程、取り上げよう。呉氏蔵北魏石床脚部の孝子伝図については、大まかな所でおよそ以上のような、三点の特色を指摘することが出来る。

ここで、図一の北魏石床脚部を、その三角形の山型の区切りに従い、三つの部分に分けて、それぞれの場面を掲げておく。図二は、石床脚部の右を、郭巨図(一)として示したものである。図三は、その中央を、郭巨図(二)とし、また、図四は、その左を、郭巨図(三)として示したものである。呉氏所蔵の北魏石床脚部の孝子伝図(図一)には、榜題の類が一切記されていない。しかし、図三を見ると、画面右端の三角形の山型の左に、右手に甬すきを持ち、黄金の釜を掘り出した郭巨と、郭巨の左に、子供を膝の上に抱いて坐る、その妻が描かれているから、本図が、孝子伝の郭巨の物語を描いたものであることは、一見して明らかである。ここで、本図の基づいたであろう、陽明本孝子伝5郭巨条の本文を示せば、次の通りである。⁵⁾

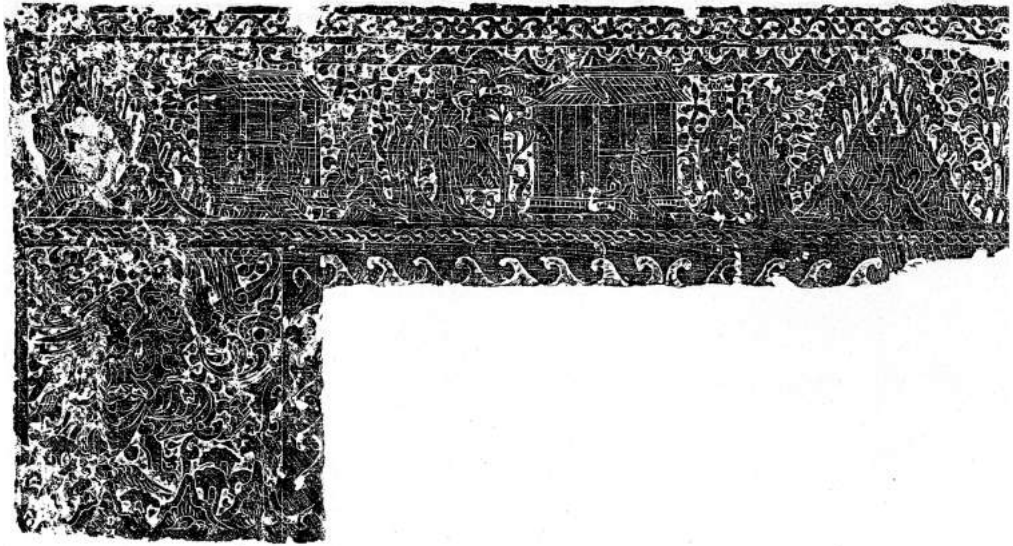
郭巨者、家貧養母河内人也。時年荒。夫妻昼夜勲作、以供^a養母。其婦忽然生^二男子。便共議言、今養^三此兒、則廢^二母供事。仍掘^地埋^之。忽得^一金一釜。々上題云、黄金一釜、天賜^二郭巨。於^是遂致^三富貴、転^レ孝蒸々。賛曰、孝子郭巨、純孝至真。夫妻同^レ心、殺^レ



图二 郭巨图(一)



图三 郭巨图(二)



図四 郭巨図 (三)

子養_レ親。天賜_ニ黄金、遂感_ニ明神。善哉孝子、富貴栄_レ身
本図(図三右)は、例えば陽明本孝子伝によると、

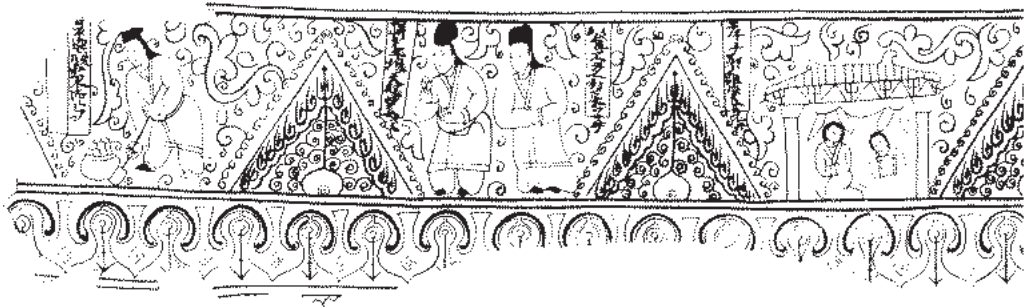
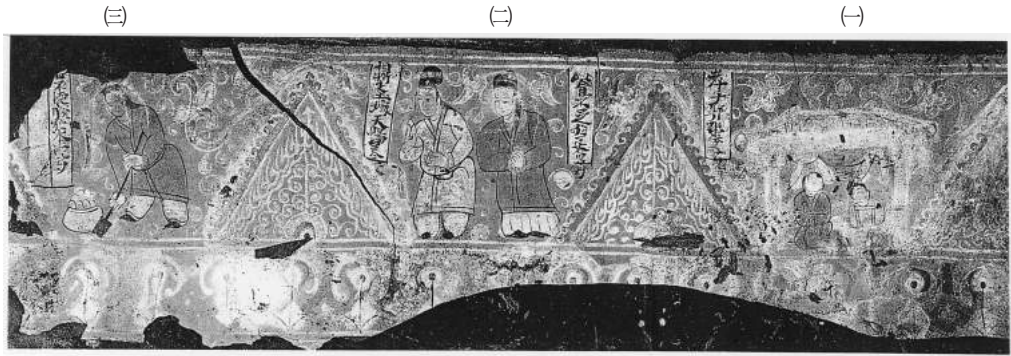
〔郭巨夫妻〕便共議言、今養_ニ此兒、則廢_ニ母供事。仍掘_ニ地埋_レ之。
忽得_ニ金一釜_一

を描いたものであることが分かる。ところで、本図(図三右)が郭巨
図であることは、確かなこととして、ならば、続く本図の左(図三
左)、或いは、図二や図四が、同じ郭巨図であることは、どのように
して知られるのであろうか。そのことを示すのが、先に触れた、寧夏
固原博物館の所蔵に掛る、寧夏固原北魏墓漆棺画の郭巨図に外ならな
い。

当漆棺画には目下、三図の郭巨図が残されているが、当漆棺画の郭
巨図は、呉氏蔵北魏石床脚部に描かれた郭巨図と、非常に密接な関係
を持っているのである。図五は、寧夏固原北魏墓漆棺画の左側板、舜
図から続く、郭巨図(一)―(三)三図を示したものである(下に、線描の模
写図を添える)。当漆棺画の郭巨図(一)―(三)の三図には、四つの題記が
あり(一)に1、(二)に2、(三)に1)、それらの題記を示せば、次の通り
である。

- (一) 孝子郭巨_(巨)供養老母(孝子郭巨_(巨)、供養老母_(巨))
- (二) 1 以食不足_(餓)殺子_(餓)專母(以_(餓)食不_(餓)足、殺_(餓)子_(餓)專_(餓)母_(餓))
- 2 相將_(餓)壘塚_(餓)天賜_(餓)皇今_(餓)一父(相將_(餓)壘_(餓)塚_(餓)、天賜_(餓)皇_(餓)今_(餓)一_(餓)父_(餓))
- (三) 官不_(得)徳_(得)脱_(得)私_(得)不_(得)徳_(得)与(官不_(得)徳_(得)脱_(得)、私不_(得)徳_(得)与_(得))

題記(一)の距は、巨の宛字である(音通による)。(二)1の子は、払いを
一画、誤記している。専は、饑_(餓)の宛字で、食物を供えること。(2)の壘



図五 寧夏固原北魏墓漆棺画 (郭巨図。下、模写図)

は、瘞^えの病垂れを省略したものであり、埋める意。皇今、父は、黄金、釜の宛字である。(二)の徳脱は、得奪の宛字で、また、与は、取る意である。当漆棺画の郭巨図(一)―(三)の三図は、上記の四つの題記によって、それぞれの図像のおよその内容を、知ることが出来る。

上記の四つの題記を、例えば陽明本孝子伝と較べてみると、題記(一)は、陽明本——線部c、aと、

(一)孝子郭巨、供養老母——孝子郭巨、供養母

のように、よく一致し、題記(二)の二句目は、陽明本——線部dと、

(二)1殺子專母——殺子(養親)

のように一致し、2の二句目は、陽明本——線部e、bと、

(二)2天賜皇今一父——天賜黄金一釜

のように、よく一致するが、(二)1、2の一句目及び、(三)は、陽明本と一致しない。特に、(三)は、陽明本の本文中に、対応する文言が見当たらない。ところが、その(三)「官不^(得奪)徳脱、私不^(得)徳与」は、例えば後世の二十四孝の郭巨譚において、

官不^(得奪)得奪、人不^(得)得取(身延文庫本全相二十四孝詩選)

と、恰もその決まり文句の如く、よく引かれるもので、その句を有する孝子伝も現存する。例えば敦煌出土の句道興搜神記や、事森などに見える、郭巨譚がそれである。まず句道興搜神記の本文を示せば、次の通りである。⁸⁾

昔有郭巨者、字文氣、河内人也。家貧、養母至孝。巨有二子、年始兩歲。巨語妻曰、今飢貧如此。老母年高、供養孝養、恐不安存。所^(有)有美味、每減与^(子)子。令^(母)母飢羸、乃由^(此)此小兒。兒可^(不)不

再有、母難重見。今共卿殺子、而存母命。妻從夫言、不敢有違。其妻抱子、往向後園樹下、欲致子命。巨身掘地、欲擬埋之。語其妻曰、子命尽末。妻不忍、即害、必称己死。巨掘地得一尺、乃黃金一釜、々上有銘曰、天賜孝子之金。郭巨殺子存母命、遂賜黃金一釜。官不得奪、私不得取。見金驚怪、以呼其妻、々乃抱子往看。子得平存未死、妻乃喜悅。遂即將送果、々牒上州、々送上表、々上台省。天子下制、金還郭巨、供養其母、標其門閭、以立孝行、流伝万代。後漢人也（中村不折旧藏本）

次に、事森の本文を示せば、次の通りである。

郭巨、字文举、河内人也。家養（養）母至孝。妻生二子、年三歲。巨謂妻曰、家貧如此。時歲飢虚、所德充（德）飲食、供（老）養孝母、猶不充飽、更被嬰孩分母飲食。子可再有、母不可得。共卿埋子、以全母命。不妻不敢違、從夫之意。巨自執鋸、妻乃抱兒、来入後園。令妻殺子、巨即掘地、纔深一丈尺、德（得）着一鉄器。巨低腰顧視、乃見一釜、々中滿盈黃金。巨連招妻曰、抱兒則至。兒且猶活、妻不忍下（下）手。夫謂妻曰、卿見此釜之金。其上有鉄券云、天帝賜孝子黃金、官不得奪、移不許侵。巨既得、驚怪不以。乃陳於懸、々已申州、々与表奏天子。々々詔曰、金還郭巨、供養其母、乃表門以彰孝德。（孝）子伝

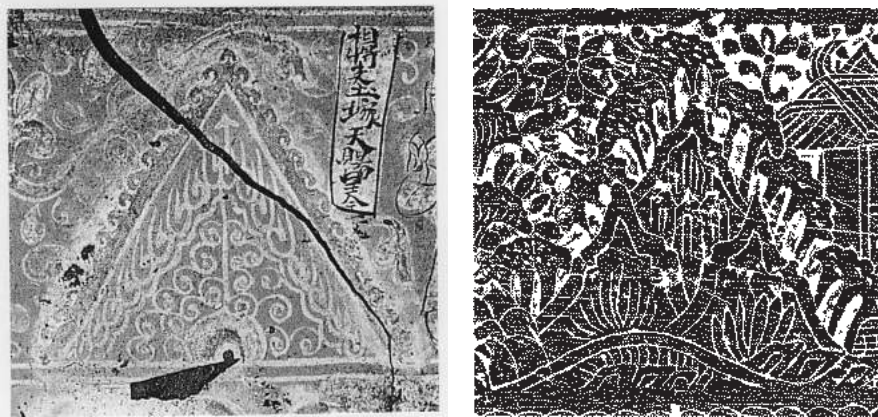
両書の——線部に、(三)の類句が見えている。句道興搜神記の郭巨譚は、出典名を記さないが、孝子伝を出典とする、事森のそれと、内容が酷

似しているので、句道興搜神記の郭巨譚も、孝子伝を引いたものと見て良いであろう。さて、(三)の句が、当漆棺の郭巨図の題記として見えることで、その句の成立に関し、当漆棺の制作された北魏時代、五世紀以前に溯ることが判明することは従来、その句の上限を、唐代とする文学研究上、大変驚くべき事実としなければならぬ。

呉氏蔵北魏石床脚部の郭巨図（図一）は、当漆棺の郭巨図（図五）と酷似する。次に、それら二つの郭巨図の關係を考えてみたい。

二

北魏石床脚部と寧夏固原北魏墓漆棺画の二つの郭巨図間における、深い関連性を、一見して印象付けるのは、何と言っても両図間に共通する、画面の区切りとしての、三角形の山型である。二つの異なる郭巨図に、共通して現れる、互いに酷似した、その三角形の山型こそは、両図の間の深い關係を、決定的なものとする、一証と言って良い（図六）。但し、互いに酷似する、三角形の山型ではあるが、本石床脚部のそれは、岩山（三つの岩山）の二辺を、銀杏の樹が飾るのに対し、当漆棺画のそれは、黄色の火炎紋によるものという、相違があつて、その違いはまた、二つの郭巨図（孝子伝図）における、背景のデザインとの相違に由来することが、非常に面白い。このように互いに共通する、三角形の山型が、画面の区切りとして用いられることについては、例えば本石床脚部の図像が、脚部の言わば上欄という、細く長い空間に描かれていること、そして、当漆棺の孝子伝図もまた、棺体両側板



図六 三角形の山型 (右、石床脚部。左、漆棺画)

の上欄に描かれていることを、考慮する必要がある、孝子伝図以外の図像の様式に關しても今後、検討する必要がある。ともあれ、そのような遺品の上欄部に描かれた郭巨図と、孝子伝図粉本との關係についてはまた、後述しよう。

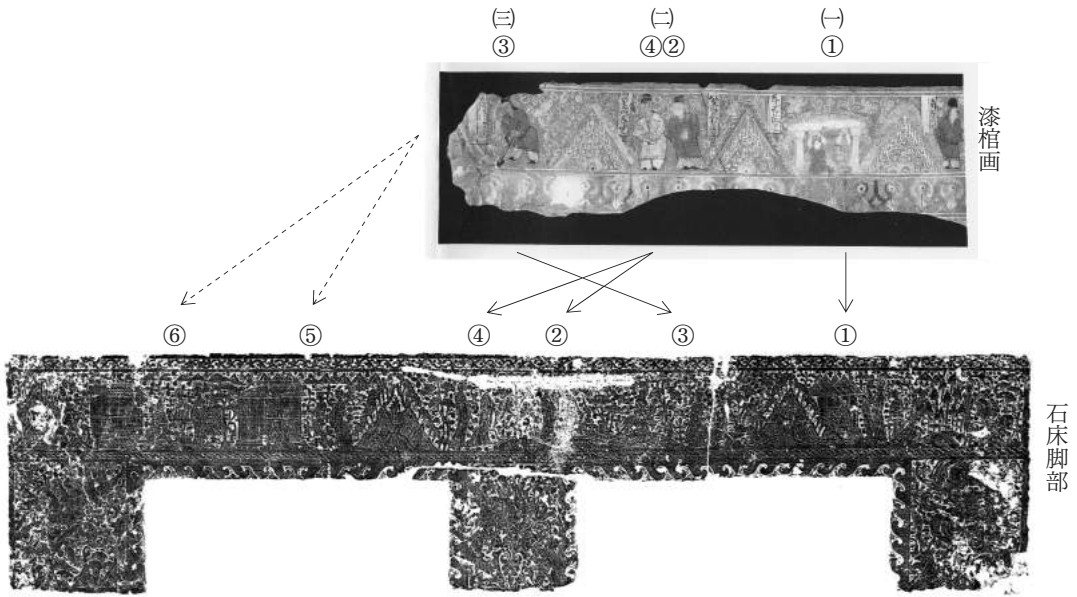
さて、まず呉氏藏北魏石床脚部の郭巨図は(図一)、結論から言えば、孝子伝の郭巨の物語に記される、次の六つの場面によつて、構成されたものと考えられる。

- ① 供養 (プロローグ)
- ② 道行
- ③ 穴掘り、黄金
- ④ 運搬
- ⑤ 供養 (大団円1)
- ⑥ 官の黄金返還 (大団円2)

このことを以下、当漆棺の

郭巨図(図五)との關係、さらに他の郭巨図との關係から、説明してみたい。図七は、石床脚部(上)と漆棺画(下)の二つの郭巨図間における、上記①―⑥による、場面の対応關係を示したものである。

まず当漆棺の郭巨図の第一図(一)は、その題記「孝子郭巨、供養老母」から、①供養図であり、プロローグに当たる図像であることが明らかである。その(一)(図五)は、屋中に坐る二人の人物を描く。天井には幔幕が描かれている。右に坐るのが、郭巨の母で(左向き)、母の持つ四角いものは、おそらく食器を載せる膳である。その左に跪くのが郭巨で(左向き)、郭巨が頭を廻らして、その膳を注視しているのは、母の食事の充ち足りていることを、確かめているのであろう。また、(二)1の題記、「以食不足、殺子專^(鯉)母」を、(一)の場面に掛けて考えるなら(後述)、郭巨は、母の食事の十分でないことを、憂えていることになる。また、(一)の場面には、郭巨の子供も描かれていなければならぬが、(一)にそれが描かれていないのは、場面空間が狭いことから、それを省略したものと思われる。さて、当漆棺(一)①の場を、石床脚部と対応させると、それは、正しく石床脚部①に該当することが、直ちに了解されるであろう(図七)。その①(図二(一))は、画面の左に、一つの家屋を描き、屋内には、二人の人物が、拱手して坐っている。右が郭巨の母で、左が郭巨の子供である(共に右向き)。屋外には、五人の立っている人物が描かれるが、画面右端の馬の左が郭巨で(左向き)、その左が郭巨の妻と考えられる(右向き)。その左の三人は、侍者であろう。そして、石床脚部の第一図(図二(一))は、郭巨図の上記①供養(プロローグ)図であることが、確認さ



図七 石床脚部と漆棺画の郭巨図

れるのである。

ところで、聊か解釈に苦しむのは、当漆棺郭巨図の第二図(図五(二)、図七(二))である。その郭巨図(二)が、二つの題記を有することは、前述の通りであるが、まずそれらの題記に言うことと、その図像とが、上手く一致しないのである(図八)^(註)。郭巨図(二)の題記は、

(二) 1 以_レ食不_レ足、殺_レ子專_レ母_(應)

2 相将_レ壘_レ塚、天賜_レ皇今_(黄金)一父_(釜)

と言うものであった。一方、その図像は、右に郭巨、左に妻が立っているだけの、極めてシンプルなものとなっている(共に左向き)。また、郭巨は、右手に花弁様のものを持っているが、それは、実は黄金であろうと考えられる(図五(三)、後掲図十一参照)。その中に、r字形の線が見え、もと三枚の黄金が描かれていたものの、両脇の二枚が消えてしまったものであろう。さて、その図像は一体、どのような場面を表わしているのか。それは、続く(三)の場面が、③穴掘り、黄金を描いているから、②道行の場面、即ち、子供を埋めるために、三人で例えば「山中」(船橋本)へと向かう、場面でなければならぬ。そこには、子供が見当たらないが、(一)同様に、省略されたものであろう。従って、(二)(図八)は、②道行の場面と判断されるが、題記(二)1また、2共、②道行に関わる記述を含まない。強いて考えるなら、2の「相将_レ壘_レ塚」が、道行に当たると言えなくもないが、「天賜_レ皇今_(黄金)一父_(釜)」のそれに続くことを思えば、

2 相将_レ壘_レ塚、天賜_レ皇今_(黄金)一父_(釜)

は、むしろ郭巨が黄金を掘り出して、(三)(図五(三)、後掲図十二)



図八 漆棺画の郭巨図（二）

の題記とすべきものである。また、

1 以_レ食不_レ足、殺_レ子專_レ母^{（懸）}

も、道行との関わりは、非常に薄く、(二)1もまた、(一)図五(一)の題記と見るのが、むしろ自然であることは、先に触れた通りである。このように、当漆棺の郭巨図(二)（図八）は、二つの題記が、その図像と対応しないのである。加えて、(二)の図像の解釈を困難なものとするのは、(二)の郭巨が、外ならぬ黄金を手に行っていることである。一見、その黄金は、題記2の、「天賜_二皇今_一父_{（金）}」と照応するかに見えるが、

その題記2は、次の(三)のものとすべきこと、前述の通りで、その理由は、②道行の場面においては、郭巨が未だ黄金を掘り出していないため、次の(三)の場面において、発見される筈の黄金を、(二)の郭巨が持っていることは、どのように考えても、おかしいと言わなければならぬ。さて、当漆棺の郭巨図(二)の図像には、一体何が起きているのであろうか。考えられることは、郭巨図にはそもそも、言わば道行が二つあって、当漆棺の郭巨図(二)は、その二つのものを、一図に重ねたのではないか、ということである。二つの道行とは、まず子供を埋めに行く道行であり（上記の②道行が、それに当たる）、次いで、黄金を得て帰路に付く、第二のそれである（③運搬が、それに当たる）。即ち、当漆棺の郭巨図(二)は、構図が同じ二場面の道行を、一場面に集約してしまつたのではないか。そのように考えると、(二)が(三)に先立つ、②道行でもあり、また、③の黄金運搬の場面として、(二)の郭巨の黄金を持つていることも、説明が付くであろう。さらに、当漆棺が一場面以上に互る、場面の省略を行ったことで、結果として題記と図像との間に、ずれが生じ、上述のような不対応を招いたことも、了解されるのである。当漆棺の郭巨図(二)が、どうしてそのような無理をして、②道行と③運搬の二場面を集約したのか、という理由については、当漆棺の郭巨図が、左側板の終端に位置し、画面の空間の不足したことが考えられよう。私見によれば、当漆棺の郭巨図(三)（図五(三)、図七(三)）の左には、例の三角形の山型が続き、さらにもう一、二場面が描かれていたものと思われるが（⑤供養へ大団円1、⑥官の黄金返還へ大団円2）など、現に復元された当漆棺の左側板終端を見ても、続く

三角形の山型すら、辛うじて収まるかどうか、という状況なのであつて(図九)、郭巨図に関する画面空間の不足は、当漆棺の制作者にとつて、切実な問題であつたに違いない。このことから、当漆棺の郭巨図(二)は、聊か變則的に描かれたものとして、極めて構図の似る、②道行と③運搬の二場面を、一つの場面に兼ねるものと解釈される。

当漆棺の郭巨図(三)(図五(三)、後掲図十一)は、上記③穴掘り、黄金の場面を描いていることが明らかである。左向きに立つ郭巨は、両手に舌を持ち、やや足を開いている。その郭巨が、上半身を左に屈めているのは、掘り出した黄金を見て、驚いているのであろう。舌の左に



図九 漆棺画左側板終端

は、丸い釜と、その口から溢れる黄金が描かれている。その黄金の一枚が白いののは、本場面の題記(三)から考えて、「鉄券」(事森。二十卷本搜神記「丹書」)である可能性が高い(後述)。この郭巨図(三)には、妻と子供も描かれている筈だが、省略されたものであろう。さて、③穴掘り、黄金を場面とする、郭巨図(三)と、右の(二)との順序を考えるならば、先立つ(二)は、前述のように②道行と、④運搬との二場面を兼ねる図像だから、(三)と(二)とは、

(二) (②道行) ↓ (三) (③穴掘り、黄金) ↓ (二) (④運搬)

の如く、郭巨図(二)が二度(二) ↓ (三) ↓ (二)、参照される順序が、想定されることになるだろう。そして、郭巨図(三)の左は、失われていて現存しないが(図九)、さらに(一) (①供養(プロローグ))。図五(一)、図七(一)に対応する、⑤供養(大団円)や、題記(三)を受ける、⑥官の黄金返還などの場面が、あつたものと推定される。当漆棺の郭巨図(一) (三)の三図の概略は、上述のようである。次に、当漆棺の郭巨図と、石床脚部のそれとの対応を、検討しよう。

三

呉氏蔵北魏石床脚部においては、③穴掘り、黄金の場面が、郭巨図の二番目の場面となっている(図一、図三(二))。前述、第一の三角形の山型の左の場面が、それである。図十は、石床脚部の②穴掘り、黄金の場面を示したものである。図十を見ると、画面右には、右を向いて立つ郭巨、左には、右を向いて坐る、郭巨の妻が描かれている。郭



図十 郭巨図第二場面

巨は、右手に甬の柄の先を持ち、左手を前方斜め下へ差し出して、開いた掌を黄金に向けている。その袴の裾が捲かれて、両足が見えており、左足の先は、甬に掛けられているようである。その甬の右に描かれているのは、郭巨の掘り出した、黄金の釜である。その釜の口から、

短冊様のものが出ていることに、注意したい。それは、黄金の釜に添えられた鉄券、丹書であろう。郭巨が左手を黄金の方へ差し伸べ、妻を振り返っているのは、黄金の出現を妻に告げ知らせているのである。一方、郭巨の妻は跪き、膝の上に抱いた子を、左手で支えている（子供は、左向き）。妻の右手が子供を指すのは、黄金の出現によって、その子供が殺されずに済むことを、夫に確認しているのであろう。ところで、図十の郭巨の姿形は、例えば上半身と手や足などが、バランスを失い、極めて異様である。特に左手が異常に長く、足も短くて大きい。足のバランスの崩れた例は、例えば当漆棺前檔の墓主人像などに見られるが、興味深いのは、図十の郭巨と同様に、当漆棺の郭巨図(三)、③穴掘り、黄金の場面に描かれている、郭巨の手もまた、異様に長いことである(図十一)。図十一を見ると、郭巨の右手が異常に長く、殆ど足首に達し掛けていることが分かる。また、上半身と足のバランスも良くない。このように、右手が異様に長い例は、他にも北魏司馬金竜墓出土木板漆画屏風の第3塊表1層、啓母塗山図などに見出だされ、北魏時代の人物図像には、珍しいことではなかったらしい。

さて、石床脚部の二番目の図が③穴掘り、黄金の場面であることは、上述の如くだが、では、当漆棺第二図の②道行(④運搬)に該当する場面は、石床脚部の郭巨図においては一体、どうなっているのだろうか。その二つの場面は、③穴掘り、黄金の左に描かれているものと考えられる。図三(二)の左を見ると、銀杏の樹を距て、右を向いて立つ、四人の人物が描かれている。図三(二)の左の上部には、損傷が認められ、見分けにくくなっているが、その一人目と三人目は、男性であり、二



図十二 郭巨の子供 (第三場面)



図十一 漆棺画の郭巨 (三)

人目と四人目は、女性である。そして、左の二人の人物と、右の二人の人物の間には、銀杏の樹が描かれているので、図三(二)の左半は、異なった二つの場面を、表わすものと考えられる。また、一人目の男性は、左手に、三人目の男性は、右手に、棒状のものを握っており、それは、甬であろう。一人目の男性の左手もまた、異様に長い。さらに、一人目の男性は、後を振り返って、よく見ると、二人目の女性の左下には、子供も描かれている(図十二)。しかも、恐ろしいことに、その子は、手を前に縛られているようである。これらのことから考えて、図三(二)の左半に描かれた、二組の男女は、郭巨夫婦に違いない。二組目の夫婦に、子供が描かれていないのは、例の如く省略されたものであろう(黄金も同じ)。

図三(二)左半に描かれている、二組の郭巨夫婦は、例えば当漆棺郭巨図(二)の②道行、④運搬場面(図五(二)、図八)と同じ構図を持っており(向きは逆)、それらは、石床脚部の郭巨図における②道行と④運搬の場面を、表わしたものと考えられる(図七)。すると、石床脚部の郭巨図の場面順序は、

① 供養(ブローグ) ↓ ③ 穴掘り、黄金 ↓ ② 道行 ↓ ④ 運搬

となり、②と③が逆となって、③が先に描かれていることになろう(図七参照)。それは、③穴掘り、黄金の場面こそが、郭巨図全体の眼目に当たる、重要な場面であって、比較的地味な②道行に代え、③を前に出すことによって、それを強調しようとした処置であろう。その結果、石床脚部の郭巨図においては、酷似した構図の②道行、④運搬の二場面が、纏めて図三(二)左半の一箇所に配されるという、聊か奇妙

な場面構成を、取らざるを得なくなつてしまつた。いずれにせよ、注目されるのは、当漆棺の郭巨図(二)及び、石床脚部のその図三(二)左半の二遺品が共に②道行、④運搬という、同じ場面を表わしており、加うるに、二遺品がそれらの順序を変え、一箇所に纏めるなど、互いによく似た処置を施していることである(図七参照)。それらの一致は無論、偶然の出来事に過ぎないが、その背景にはおそらく、卷子形態の孝子伝図(郭巨図)の同一の粉本があつて、それを写す二遺品の画面空間即ち、棺体側板上欄と石床脚部上欄の画面空間の酷似していたことが、深く関与したものとと思われる。

次いで、石床脚部の郭巨図は、二つ目の三角形の山型を置いて(図四(三)右端)、次の二つの場面へと続いている。図四(三)の右半と左半がそれである。当漆棺の郭巨図は、以下を失つていたので、比較が出来ない。まず図四(三)の右半は、一軒の家屋を中心に、五人の人物を描いたものである。その家屋は、①供養(プロローグ)の場面の家屋と同じもので(図二(二)参照)、郭巨の家である。家屋の右に、郭巨夫婦が拱手して立っている(共に左向き)。左が郭巨、右が妻である。さらに妻の腰の右には、子供が一人、描かれている(右向き)、その子供は、前の④運搬の場面(図三(二)左)にいる筈の、郭巨の子である。或いは、その場面をここで、繰り返し用いたのかも知れないが、不審が残る。屋内には、郭巨の母と子供が、拱手して坐っている(共に右向き)。さて、この場面は、上記⑤供養(大団円一)を描いたものと考えられ、郭巨図全図において、①供養(プロローグ)と対応する。それは、郭巨が母に、黄金の発見を報告する場面なので、そこには当

然、黄金の釜も描かれていなければならないが、省略されている(次の場面も同じ)。なお黄金の釜の省略は、ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺の郭巨図における、同場面などを始めとして、時々見掛けることがある。

ここで、石床脚部の⑤供養(大団円一)と酷似する、場面を持った郭巨図を一例、紹介したい。図十三は、和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床脚屏の右側板三面に描かれている、郭巨図を示したものである(その三面全てに榜はあるが、文字はない)。図十三(一)は、郭巨図の③穴掘り、黄金の場面を描き、その(二)は、④運搬の場面を描いたものである。(一)は、石床脚部図三(二)の右半に該当し、また、その(二)が、図三(二)左半の左に該当することに、注意すべきである。図十三(二)においては、子供と黄金の釜とが省略されることなく描かれている。図十三(三)は、⑤供養(大団円一)の場面を描いたものである。画面右端に、拱手して跪いているのが、郭巨であり(左向き)、左端に、拱手して立っているのが、その妻である(右向き)。画面左寄りには、一軒の家屋が描かれ、その屋内中央に、一人の婦人が、やはり拱手して坐っている(右向き)。それが、郭巨の母である。母の前の庭上に、黄金の釜が据えられている。しかし、子供の姿は、何処にも見当たらず、省略されたものであろう。その(三)と、図四(三)の右半とを較べてみると、一見して、両図の構図の酷似していることが分かる。そして、図四(三)の右半は、⑤供養(大団円一)の場面を描いたものであることが、直ちに了解されるのである。

次の図四(三)左半は、一本の銀杏の樹が右半と隔てているので、右半

(一)
③

(二)
④

(三)
⑤



図十三 和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床（郭巨図）

とは別の場面と見るべきことが知られるが、それは、構図として右半と殆ど同じものとなっている。即ち、画面右に立っているのが、郭巨夫婦である（但し、夫婦の左右は、入れ替わる）。左には、右半と同様の家屋が描かれ、その屋内に、郭巨の母と子供の坐っていることも同様で、黄金の釜もまた、見当たらない。どうやら石床脚部の郭巨図の制作者には、郭巨夫婦の道行を並べたり（図三（一）左）、郭巨の家を並べるなど（図四（三））、同じ構図を繰り返し描く、傾向があるようだ。ただ一点、右半と大きく異なるのは、郭巨夫婦の左に、冠を被り、その母に対して跪く、もう一人の人物が、描き加えられていることである。さて、その人物は一体、何物なのであろうか。それは前述、当漆棺の郭巨図（三）の題記に、「官不_(得奪)徳_(得奪)脱、私不_(得奪)徳_(得奪)与」とあつたように（図五（三）、図十一）、郭巨の掘り出した黄金の釜が、郭巨のものであることを、郭巨に告知すべく、天子から遣された、勅使の官人であろうと考えられる。そのことは、陽明本孝子伝等には見えないが、例えば句道興搜神記に、

遂即將送_レ県、々牒上_レ州、々送上_レ表、々上_二台省。天子下_レ制、金還_二郭巨_一、供_二養其母_一、標_二其門閭_一、以_レ立_二孝行_一、流_二伝万代_一。

と記された、事森の引く孝子伝に、

乃陳_二於懸_一、々已申_レ州、々与表_二奏天子_一。々々不_レ詔曰、金還_二郭巨_一、供_二養其母_一。乃表_レ門以_レ彰_二孝徳_一。（孝）子伝

とされる通りである。そして、その官人は、短冊様のものを捧げているが、それは、おそらく黄金の釜に添えられていた鉄券と、深い関係がある（図十四）。郭巨の掘り出した黄金の釜には、鉄券（丹書）が



図十四 鉄券(黄金の釜。右)、官人(左)

添えられていたが(図三(二)右、図十四右)、それにはやはり、理由がある。鉄券丹書は、下行文書の一とされ、確約や宣誓文言を内容とし、通常、割符の形式で発行される。そして、その起源は、古く漢代に遡るといふ。鉄製で、朱書されたことから、その名がある¹⁹⁾。黄金の釜に付いていた、鉄券の記載には、例えば陽明本孝子伝の、

々〔釜〕上題云、黄金一釜、天賜郭巨

と言う、簡単なものから、例えば事森所引孝子伝の、

其上有鉄券云、天帝賜孝子黄金、官不_レ得_レ奪、移_レ不_レ許_レ侵
 などとする前述、当漆棺の郭巨図(三)の題記「官不_レ徳_レ脱、私不_レ徳_レ与」を
 追記するものまで、二、三のヴァージョンがあるが、郭巨の地中から
 掘り出したのは、そもそもが財産価値の高い、黄金であったことから、
 その黄金の所有権が誰に属するのか、という問題をめぐっては、孝子
 伝としてのストーリー展開上、疑問が生じてはならない。従って、そ
 の鉄券こそは、そのような疑いを払拭すべく、黄金が郭巨のものであ
 ることを、天が保証した、必須不可欠の仕掛けに外ならない。さて、
 通常、「家_レ貧養_レ母」(陽明本)とされる郭巨だが、面白いことに、そ
 の郭巨を大金持とする、別伝もある。それは、西野貞治氏により六朝
 仮託の指摘される、劉向孝子伝である²⁰⁾。参考までに今、その逸文本文
 を示せば、次の通りである(太平御覧四一一に拠り、法苑珠林四十九
 へ)を参照する)。

劉向孝子図曰、郭巨河内温人。甚富。父没分_レ財、二千万為_二兩分_一。
 与_レ兩弟、己独取_レ母供養。寄_レ住〔比〕隣有_二凶宅無_二人居者、共
 推与_レ之居無_二禍患。妻産_レ男。慮_レ養_レ之則妨_レ供養。乃令_二妻抱_レ兒、
 欲_レ掘_レ地理_二之於土中。得_二〔黄〕金一釜、〔金〕上有_二鉄券_一云、
 賜_二孝子郭巨。巨還_二宅主、宅主不_レ敢受。遂以聞_レ官、官依_二券題_一
 還_レ巨。遂得_二兼養_レ兒

劉向孝子図は、郭巨を「河内温人」(河南省温県)とする。物語の大筋は、陽明本孝子伝以下と変わらないが、面白いのは、郭巨が母と暮らすに至った経過について、郭巨は始め、

甚富

とあって、意外なことに、郭巨は、決して貧乏だった訳でなく、貧乏どころか逆に、大金持だったことが、知られることである。そして、劉向孝子図が特異なのは、それまでの経過に關し、甚富。父没分財、二千万為二兩分。与二兩弟、己独取レ母供養とすること、家財を全て失った郭巨が、

寄住〔比〕隣有凶宅無人居者、共推与レ之居無禍患

としていることの、二点においてである。前者は、陽明本以下の資料に、そのことを記すものを見ず、独り二十卷本搜神記十一に、

郭巨隆廬人也。一云、河内温人。兄弟三人、早喪父。礼畢、二

弟求分。以錢二千万、二弟各取二千万

とするもののみが、それと共通する(隆廬は、河南省林県)。また、後者も同じで、ただ二十卷本搜神記に、

巨独与レ母居客舍、夫婦備質、以給公養

とするものだけが、それを思わせる。劉向孝子図(二十卷搜神記)を見ると、黄金の釜に鉄券の添えられていた理由が、極めて明瞭となる。即ち、郭巨は、無断で人の土地に住んでいた訳で、偶々そこで掘り出した、黄金の釜であつてみれば、それを掘り当てた郭巨自身にさえ、それが自分の物であるとは、夢にも思えなかつたのである。だから、劉向孝子図に、

巨還宅主、宅主不敢受

と言うように、郭巨は、その黄金の釜を家主に返そうとしている。このことはまた、劉向孝子図にしかない、プロットとなっている。このように、劉向孝子図を見れば、黄金の釜の所有者というものは本来、

曖昧な一面を持っていたことが理解される。そこで、もし天がそれを郭巨に与えたのであれば、天はそのことを明言する必要があり、だからこそ、天は、天帝からの下行文書としての鉄券丹書の形を借りて、そこに、

黄金一釜、天賜郭巨(陽明本)

と、それが郭巨のものであることを、明記したのである。しかし、劉向孝子図(二十卷本搜神記)に記す如く、それが真に郭巨のものかどうか、疑いを容れる余地が存する場合、黄金の所有権をめぐる、訴訟沙汰に発展することも、十分想定されよう。句道興搜神記以下においては、現にそのような事態に発展した訳で(訴人は、事森の「巨……乃陳於懸」によれば、郭巨自身であつたらしい)、だから、前述、鉄券に、

官不得奪、私不得取(句道興搜神記)

と追記される文言は、天がそのような事態を予め封殺するために、置かれたものと考えられる。そして、最終的には、天子自らがその天言を確認し、黄金を郭巨のものと裁定して、その郭巨への返還を決定する。その結果、石床脚部の郭巨図(三)左に描かれた、勅使の官人が、郭巨の家に派遣されることになる(図四(三)左、図十四左)。郭巨の物語の起源は、はつきりしない。或いは、劉向孝子図(二十卷本搜神記)のような形が古く、陽明本孝子伝のような、一般的な郭巨物語の形は、それを単純化することにより、成立したのかも知れない。或いは、その逆の筋道も、十分に考えられる。いずれにしても、当漆棺の郭巨図(三)の題記「官不得脱、私不得与」や、石床脚部の郭巨図(三)左に描

かれた官人は、上述のような、郭巨の物語の成立の根幹に関わる、問題を生んでいることに、今後共注意する必要があるだろう。さて、図十四の、石床脚部に描かれた、黄金の釜の鉄券と官人とは、黄金の帰属者をめぐる、深い関係のあることが知られる。そして、官人の捧げる短冊様のものは、おそらくその鉄券なのかも知れない。鉄券でないとするれば、その内容を確認する勅書であろう。後述するように、郭巨図は通常、上記⑤供養(大団円1)の場面で終わるものが多い。しかし、例えば当漆棺の郭巨図(三)の、「官不_レ徳_レ脱_レ、私不_レ徳_レ与_レ」のような、題記を持つ郭巨図が、外の社会と関わりの薄い、言わば閉じられた家庭内のエピソードたる、⑤供養(大団円1)の場面で終わることとは、一寸考えられない。即ち、当漆棺の郭巨図(三)のような、題記を持つそれは、題記の内容と照応する、もう一つの大団円としての、⑥官の黄金返還(大団円2)を、必ず必要とするだろう。すると、当漆棺の郭巨図(三)(図五(三)、図十一)に続く図像は、石床脚部の郭巨図(三)(図四(三))、取り分け、その題記(三)と関わりの深い、勅使の官人の登場する、図四(三)右の、⑥官の黄金返還(大団円2)であった可能性が、極めて高いとしなければならない。そもそも石床脚部の郭巨図が、当漆棺のそれと、密接に関連していることは、具体的に前述した通りである。そして、当漆棺の郭巨図(三)に続く筈の、失われたその場面は、石床脚部の郭巨図(三)(図四(三))に、その姿を留めるものと推定されるのである。図七の点線矢印は、そのことを示したものである。

四

孝子伝図の郭巨と言えば従来、郭巨図の名を世界的に高からしめた学者として、奥村伊九良氏の名を逸することは出来ない。奥村氏はまず、昭和十二(一九二二)年五月に刊行された、名論文「孝子伝石棺の刻画」において、当時のウィリアム・ロックヒル・ネルソン美術館(現、ネルソン・アトキンズ美術館)に所蔵される優品、北魏石棺の郭巨図を紹介され(後述)、特に見事な拓本の付図は、当時の印刷技術の粋を尽くしたもので、今日になお、その学術的価値を失っていない。氏はまた、その翌々年の昭和十四(一九二五)年二月刊行の、「鍍金孝子伝石棺の刻画に就て」において、現在ミネアポリス美術館に所蔵される、北魏石棺(元謚石棺)の郭巨図をも紹介されており、その奥村氏の両論文こそは、近代における孝子伝図研究ないし、郭巨図研究の礎^{いしづえ}を築くものとなったのである。戦後になると、奥村氏の業績の跡を継いだ、長廣敏雄氏が、昭和四十(一九六五)年刊行の『漢代画家の研究』二部「武梁石室画家の図象学的解説」において、郭巨図こそ含まないものの、武梁祠画像石の孝子伝図などをめぐりその後、世界に誇る金字塔となった、成果を上げられているし、また、昭和四十四(一九六九)年刊行の『六朝時代美術の研究』八、九章において、これも大変重要な遺品である、ネルソン・アトキンズ美術館蔵北齊石床の郭巨図を、拓本により紹介されている。²⁶それら美術、考古学方面の業績に対し、文学の方面における、画期的な業績として、上記長廣二書の出版にやや先立ち、図像の典拠をなしたテキスト即ち、

孝子伝——特に我が国にのみ伝存する、二種の完本古孝子伝の文学史的価値と意義、図像との関連の問題を闡明された前述、西野貞治氏による名論文、「陽明本孝子伝の性格並に清家本との関係について」が世に出されたのは、昭和三十一年七月のことである。故に、近代において、郭巨図を始めとする、孝子伝図の研究が、典拠の研究と一体となつて、本格的に始動を開始するのは、西野論文以後と見なければならぬ。話を郭巨図に戻すと、西野論文の公刊された次の年、一九五七年には、非常に美しい、鄧彩色画像の郭巨図が出土している。

しかし、近代的な郭巨図研究が展開するための、その原動力となるような、真に学術的価値の高い、郭巨図の出現は、何と言つても一九八〇年代以降を、俟たなければならなかつた。例えば、まず寧夏固原北魏墓漆棺画の場合(図五)、墓そのものは、一九七三年に発見されているが、肝心の当漆棺が正式に報告されたのは、八四年五月のことであり、その美事な図録、『固原北魏墓漆棺画』の公刊は、八八年七月のことである。当漆棺の郭巨図が、新出の石床脚部のそれと、深い関係を持つことは、前述の通りであるが、当漆棺のそれは、例えば棺側上欄に描かれた孝子伝図として、極めて珍しいもので、三角形の山型で区切られる、そのような形式の孝子伝図は、これまで全く知られることがなかつた。そして、例えば当漆棺の郭巨図に先立つ舜図は、計八面から構成されるという、これまた、全く前例を見ない、非常に珍しい場面構成を持つもので、中でも、その場面数の多さは、群を抜いており、学術的に十分注目すべきものである。現にその郭巨図(一)の①供養(プロログ)の場面は、当漆棺の出現によって、始めてその

存在を、知られるに至つたものである(図五(一))。また、一九九二年から九三年にかけて、唯一唐代の孝子伝図として知られる、陝西歴史博物館蔵三彩四孝塔式缶が発見された³¹⁾。それは、缶体に詳細な題記を伴う、四面三種の孝子伝図を持つもので、その一つは、郭巨図である。次いで、平成六(一九九四)年には、和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床が、当該美術館の所有に帰し、公開された³²⁾。その石床囲屏、右側板三面に描かれた郭巨図については、既に紹介した通りであるが(図十三)、当石床の郭巨図が出現するまでは、二連のそれは知られていなかったものの(C.T. Loo 旧蔵北魏石床)、当漆棺を除いて、三連の郭巨図は、全く知られていなかった。その図十三によって、例えば後述、ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石床の郭巨図は戦前、奥村氏がその拓本を紹介されて以来、三つの図柄から成ることが知られていたが、それは単なる工匠の意趣などに出るものでなく、孝子伝図の粉本に基づき、郭巨の三連図であつたことが、図十三の出現によって始めて確定したのである。そして、最近に到り、深川の呉強華氏の所蔵される、三遺品の郭巨図の伝存が知られるに及び、例えばその北魏石床脚部のそれは、これまで唯一、当漆棺にしか見ることが出来なかつた、①供養(プロログ)の場面を、共有するなど、当漆棺の郭巨図と、深い関連を有するのみならず、既に失われた当漆棺の一、二の場面の内容を、現に留めることなど(図七、点線矢印参照)、それが郭巨図の研究史上、極めて高い学術的価値を持つことは、前述の通りである。石床脚部と当漆棺の関係から判明する、重要な事実の一例を上げれば、例えば当漆棺において、郭巨図が含まれる、比較的保存の良い左側板

の残長は、一九五糎とされている⁽³³⁾。棺体の原物は残っていないので、その長さは、不明とするしかないが、例えば後述、ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺の長さは、二三四糎(高さ六二糎)である(奥村氏による)。一方、呉氏蔵北魏石床脚部の長さは、二〇五糎である(高さは四九糎、厚さは九糎)。聊か乱暴な仮定とはなるが、当漆棺にせよ石床脚部にせよ、いずれも人の身長に基づくものなので、仮りに今、当漆棺と石床脚部の全長を、同じものとしてみよう。さて、両者の場面数が、

- ・当漆棺——11(舜8、郭巨3)
- ・石床脚部——6

であることは、先に述べた⁽³⁵⁾。興味深いことに、当漆棺の孝子伝図の高さは、約七・五糎であり、石床脚部のそれは、約一五糎となっていて、石床脚部の図の高さは、当漆棺のその丁度、二倍分に当たっている。つまり、当漆棺の画幅スペースは、高さが石床脚部の半分しかないので、計算上、石床脚部のその二倍のスペースを、有していることになる。両者の三角形の山型の数(当漆棺12、石床脚部3)を、暫く無視して上記、両者の場面数における、石床脚部のそれを、単純に二倍すれば、十二場面となるから、当漆棺の現在の十一場面はやはり、一場面分不足していることが分かるのである。このことから、当漆棺の孝子伝図の場面数は、いづれにしても、十二(十一—二)であったことが推定出来る。石床脚部の出現は、例えばそのような事実まで、私達に教えてくれる。但し、その事実が飽くまで、石床脚部の学術的価値の一端を、示したものに過ぎず、その真の解明は、今後の探求に委

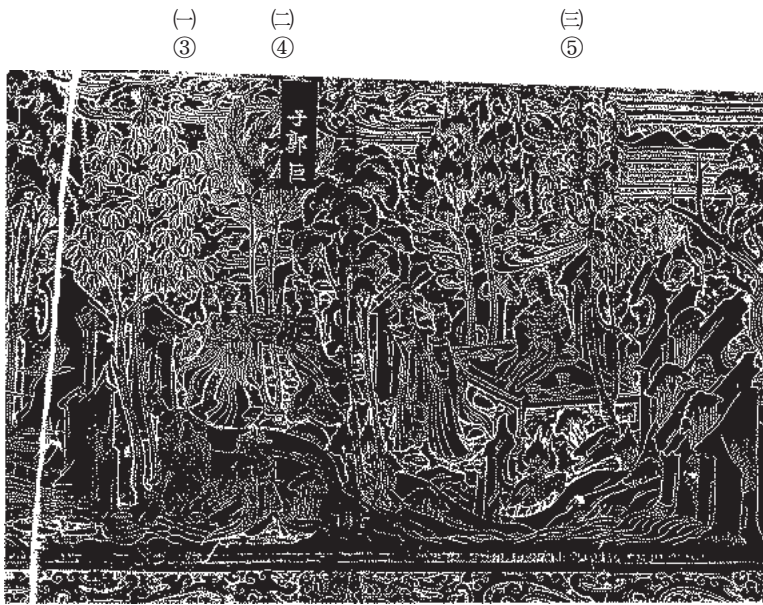
ねられる。小稿は、新出石床脚部の郭巨図をめぐり、基礎的研究を試みたものである。小稿を締め括るに当たり、その一環として、石床脚部(及び、関わりの深い当漆棺)の研究史的意義に、少し触れておきたい。始めにまず、現存する郭巨図全図の内容を、簡単に纏めてみる。次いで、その中から、主要な郭巨図遺品の一、二を取り上げ、場面毎の登場人物の関係を、聊か具体的に眺めてみる。それらを通じ、石床脚部(と当漆棺)の郭巨図の特徴並びに、研究史的意義が、浮き上がって来るだろう。

孝子伝図としての郭巨図は、これまで管見に入ったものとして、呉氏蔵の石床脚部と当漆棺とのそれを除き、以下のような十一品の遺品がある。

- (1) 江蘇徐州佻山画象石墓
- (2) ミネアポリス美術館蔵北魏石棺
- (3) 和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床
- (4) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺
- (5) C. T. Loo 旧蔵北魏石床
- (6) 洛陽古代芸術館蔵北魏石床
- (7) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北齊石床
- (8) 鄧県彩色画象甗
- (9) 襄陽賈家冲画象甗墓
- (10) 吳強華氏蔵北魏石床
- (11) 陝西歴史博物館蔵三彩四孝塔式缶

上記(1)―(11)において、(1)は、後漢時代、(12)は、唐代の遺品であるが、

残る(2)―(10)及び、石床脚部及び、当漆棺を加えた十一点は、全て北魏(―北齊)時代の遺品であつて、郭巨図が北魏時代、大変人気のあつたことが分かる。ここで、上記十一点の中から、(7)ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺と、(10)呉強華氏蔵北魏石床の二点の郭巨図を紹介する。(7)は、前述の如く、奥村氏の報告によつて、既に戦前からその



図十五 ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺 (郭巨図)

名を知られたもので、従来の郭巨図研究史において、常に規範的位置を占めた、優品である。それに対し、(10)は、深川の呉強華氏の所蔵される、もう一つの新出の郭巨図で、その題記に、陽明本孝子伝の本文引用が確認される点、画期的意義を有する、孝子伝図と言える。

図十五は、ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺の右側、二番目に描かれた郭巨図を示したものである(榜題「子郭巨」)。図十五は、郭巨の物語における、三つの情景を描いており、左下から、

- (一) ③ 穴掘り、黄金
- (二) ④ 運搬

(三) 供養 (大団円)

の場面となっている。(一)は、両手に甬を握り、右足をそれに掛ける郭巨が(左向き)、黄金の釜を掘り出した所で、郭巨の見詰める甬の左に、黄金の釜が描かれている。郭巨の右には、子供を抱いて跪く妻が、後向きに描かれる(左向き)。(二)は、郭巨夫婦が、黄金の釜に棒を通し、それを肩に担いで、家に帰ろうとする場面である(共に、右向き)。妻は、子供を右手に抱いている。(三)は、画面の左に、右を向いて立つ郭巨(右。後向き)と妻(左、画面の右に、牀の上に坐る、郭巨の母(左向き)を描いたものである。母は、右膝を立てて子供を抱き、左手に持つ食器から食物を取つて子供に与えている。(三)には、黄金の釜が見当たらないが、⑤供養(大団円)の場面である。この図十五を、はつきりと三つの場面に分けて描いているのが、図十三の和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床で、図十五(一)、(二)、(三)の三場面は、図十三(一)、(二)、(三)に対応していることが、明らかである。そして、図



図十六 吳強華氏藏北魏石床 (郭巨図)

十五は、図十三と構図が酷似している所から、決して恣意的に作画されたものでなく、おそらく共通した孝子伝図粉本に基づく、郭巨の三連図とすべきことが知られるのである。

図十六は、吳強華氏藏北魏石床、正面右石板に描かれた、郭巨図を示したものである(題記右から、「孝子郭巨殺兒養母」、「孝子郭巨」)。図十六の右は、③穴掘り、黄金の場面を描いたもので、画面左に、両手で甬を握り、左足を甬に掛けた郭巨(右向き)と、右に、裸の子供を抱いて立つ、その妻を描いている(共に左向き)。やはり郭巨の見詰める甬の右に、黄金の釜があり、それに対して、子供も右手を差し伸べる。図十六左は、⑤供養(大団円1)の場面であり、④運搬の場面は、省略されている。その画面の左には、一軒の家屋が描かれ、屋内の牀上に、左に母(右向き)と、右に、産着を着た子供(左向き)が、足を投げ出して坐っている。その母がやはり、左手に食器を持ち、右手で子供に何かを食べさせているのは、図十五(三)と同じである。画面右の庭上には、郭巨(右)と妻(左)が立っている(共に左向き)。そこにもまた、黄金の釜は、見当たらない。図十六は、例えば図十三(一)、(二)と構図の酷似していることが明らかで、一方、二連図であることから言えば、(5) C. T. Lo 旧藏北魏石床の郭巨図とも、よく似ているが(題記右から、「孝子郭巨」、「孝子郭巨天賜皇金」)、図十六において最も注目すべきは、その二つの題記、

- ・ 孝子郭巨、殺兒養母
- ・ 孝子郭巨

が、例えば陽明本孝子伝の賛に、

賛曰、孝子郭巨……殺子養親

と殆どそのまま見えることで、呉氏蔵北魏石床の郭巨図と陽明本との密接な関わりを、具体的に窺わせることである。同じことは、その正面左右板左端に描かれた、董黯図の題記にも指摘出来、図十六を含む北魏石床は、孝子伝図と陽明本孝子伝との深い関わりを、具体的に示す、研究史的に極めて重要な遺品であることが、知られるのである。

さて、石床脚部や当漆棺を含め、上記(1)―(11)に描かれた郭巨図の内容は、一体どうなっているのだろうか。先に、石床脚部及び、当漆棺の郭巨図を検討するに際し、それらを仮に、次の六つの場面に分けて考察した。

- ① 供養（プロログ）
 - ② 道行
 - ③ 穴掘り、黄金
 - ④ 運搬
 - ⑤ 供養（大団円1）
 - ⑥ 官の黄金返還（大団円2）
- ここで、まず石床脚部と当漆棺、(1)―(11)の郭巨図が、上記①―⑥のどの場面を持つか、それらの遺品名を、①―⑥の場面毎に示せば、表一のようになる（石床脚部と当漆棺は、当該場面のある(1)―(11)の部分〈図二(一)、図三(一)、図四(三)、図五(一)(三)、図七参照〉を示す。(1)―(11)の遺品名は、番号による。*は、黄金の釜が描かれていないことを表わす)。表一を見ると、郭巨図は、やはり③穴掘り、黄金の場面を描くものが、圧倒的に多い(10例)。③穴掘り、黄金は、郭巨図を代表

表一 郭巨図場面一覧

場面	遺品
① 供養（プロログ）	石床脚部(一)・当漆棺(一)
② 道行	石床脚部(二)・当漆棺(二)
③ 穴掘り、黄金	石床脚部(二)・当漆棺(三)・(1)(3)(4)(5)(7)(8)(9)(10)
④ 運搬	石床脚部(二)・当漆棺(二)・(3)(4)
⑤ 供養（大団円1）	石床脚部(三)・(2)(3)(4)(5)(6)(10)(11)
⑥ 官の黄金返還（大団円2）	石床脚部(三)*

* ― 黄金なし

するものと見られ、人気があったのだろう。次に多いのが、⑤供養（大団円1）の場面である(8例)。また、⑤しか描かないものも三例あって(2)、(6)、(11)、至孝の結果を表わす、大団円の図も、慶賀すべき供養図として、当時の人々に歓迎されたものらしい。④運搬の場面は、描くものが少ない(3例)。さらに少ないのが、①供養（プロログ）と②道行の二つの場面で(2例)、この二つの場面は、石床脚部と当漆棺の二遺品にしか、見ることが出来ない。物語的興趣に乏しくまた、道行と運搬は、物語の経過場面に過ぎないこともあって、省略される機会が、多かったものと思われる。しかし、このことは一方において、①供養（プロログ）と②道行の二場面を留める、石床脚部と当漆棺の郭巨図が、通常の遺品とは異なる、非常に重要なもの

表二 郭巨図遺品の場面一覧

遺品	場面
石床脚部	① ② ③ ④ ⑤ ⑥
当漆棺	① ② ③ ④
(1)	③
(2)	⑤
(3)	③ ④ ⑤
(4)	③ ④ ⑤
(5)	③ ⑤
(6)	⑤
(7)	③
(8)	③
(9)	③
(10)	③ ⑤
(11)	⑤

であることを、事実として示していることになる。そして、⑥官の黄金返還(大団円2)の場面を有するのは、石床脚部だけであり、それが郭巨の物語を忠実に辿った、結果と考えられることは、前述した。

次に、石床脚部と当漆棺、(1)―(11)の郭巨図が、上記①―⑥のどの場面を持つているか、それぞれの遺品の場面構成を、(1)―(11)の遺品毎に示せば、表二のようになる。表二を見ると、郭巨図の場面構成は、ただ一つの場面で構成されるものが、半数を

越える(7例)。その場面の内訳は、③穴掘り、黄金が四例、⑤供養(大団円)が三例と、その二場面の内訳も拮抗している。次いで、二連図が二例、三連図が二例ずつあって、それらの内容の一致していることがまた、興味深い(二連図は③⑤、三連図は③④⑤の場面)。そして、図抜けて場面数の多いのが、残った石床脚部と当漆棺の二例である。当漆棺の郭巨図は一見、三連図に見えるが、実は四連図と見られることは、既述の通りである。また、そのことを裏付ける遺品が、石床脚部であり、石床脚部と当漆棺の郭巨図は、①②の場面を共有するなど、互いに関係が深いことや、現存当漆棺が続きの場面(⑤⑥)を失っていることも、前述した。また、それら二遺品に、場面の数が

多いことは、共に前欄という、横に細長い画面空間の用いられることが、その理由として考えられようことも、既に指摘した如くである。そして、それら二遺品の孝子伝図は、比較的広く豊かな画面空間に、描かれたものと考えられる。すると、二遺品のそれは、例えば場面数など、素材の空間から、殆ど制約を受けることなく、余裕を持つてゆつたりと、孝子伝図の粉本を、写し取ることが出来た筈である。そのことは前述、当漆棺の舜図が計八図という、異例の場面の多さ、長さを持つもので、例えば陽明本孝子伝1の舜の物語を、

a 焚廩

b 掩井

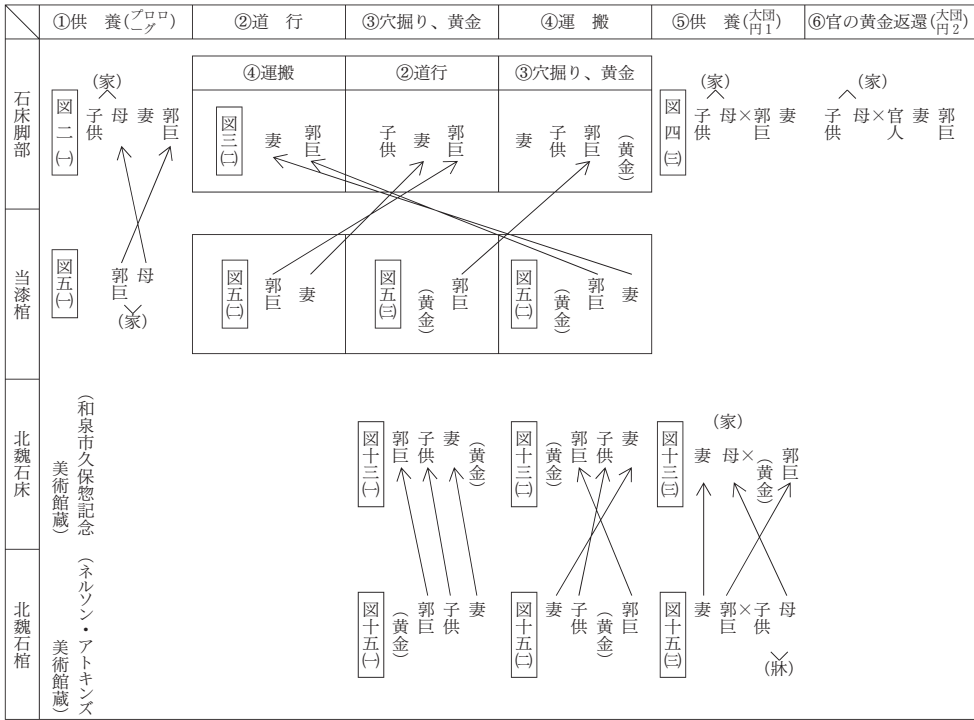
c 歴山で耕すこと

d 易米、開眼

e 堯の二女を娶ること

f 帝位を譲られること

という、六つの話柄に分けて考える時、当漆棺の舜図は、そのa、b、dを忠実に追っていることから、確認出来るのである。舜図は普通、b掩井を描くものが多く、a焚廩を扱うのは、当漆棺以外には、北魏司馬金童墓出土木板漆画屏風の一例に過ぎず、d易米、開眼に至っては、当漆棺以外に、それを画像化したものがない。このことはやはり、当漆棺の孝子伝図がその粉本に、忠実に従おうとしたことの表われであろうと思われる。そして、当漆棺の郭巨図と、石床脚部の郭巨図は、おそらく同一の粉本に基づくもので、遺憾なことに、当漆棺のそれは、画面不足のため、⑤供養(大団円1)以下を欠く、結果となつてしま



表三 北魏時代の郭巨図人物一覧

つたのに対し、石床脚部のそれは、一つはその全画面を、郭巨図一図に当てたこともあって、粉本をほぼ完全に写し取ることが出来たのである。このことから、石床脚部の郭巨図(図一)は、当時の孝子伝図粉本における郭巨図を、ほぼ忠実に写したものと判断される。題記のないことが惜しまれるが、幸いにも当漆棺の題記によって、それを補うことが出来よう。石床脚部の郭巨図は、上記(1)―(11)の遺品中、最も完全な郭巨図の一つと考えられる。その図像は、これまで郭巨図の規範とされて来た、例えば(4)ネルソン・アトキンズ美術館蔵の郭巨図(図十五)と共に、今後の研究史において、規準とされるべきものである。

最後に、表三を掲げる。表三は、小稿で取り上げた、北魏石床脚部の郭巨図(図一、図二―図四(一)―(三))及び、当漆棺の郭巨図(図五)、和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床の郭巨図(図十三)、ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺の郭巨図(図十五)の四例の図像内容を、上記①―⑥の場面に分けて、それら各場面の登場人物を中心とする、一覧に纏めたものである(横に、①―⑥の場面、縦に、石床脚部以下の遺品を配する。矢印は、遺品間における人物の対応を示し、×は、対面図となっていることを表わす。())は、家など、人物以外の図像を補ったものである。表三を見ると、まず石床脚部の郭巨図と当漆棺のそれとの密接な関係を、具体的に看取することが出来る(図七参照)。次いで、和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床の郭巨図とネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺との関係も、同様である。加えて、前二者と後二者との関係もまた、同様であり、四遺品の図像全

ては、互いに関連していることが、登場人物の様子から了解される。言うまでもなく、それらは、孝子伝図であり、その粉本から出た兄弟達に外ならない。そして、新出石床脚部の郭巨図は、図像内容が完備していることを始め、他図に対する、言わば規範的性格を有することが、表三を通し、確認される。

付記 小稿は、深圳金石資産管理有限公司董事總經理、呉強華氏の好意により、成ったものである。小稿のテーマとした北魏石床脚部の実見、調査、撮影を快諾するのみならず、貴重な拓本まで御恵投下さった、呉氏の学恩に対し、心から御礼申し上げたい。なお小稿は、平成二十五年年度佛敎大学特別研究費による成果の一部である。

〔注〕

(1) 拙稿「呉強華氏藏新出北魏石床の孝子伝図について―陽明本孝子伝の引用―」(『永遠的北朝』所収、文物出版社)が、中国において近く刊行される。

(2) 図一は、呉強華氏貸与の写真に拠る。

(3) 孝子伝図については、拙著『孝子伝の研究』(佛敎大学鷹陵文化叢書5、思文閣出版、平成13年) II 一参照。

(4) 図二、図三、図四は、呉強華氏貸与の拓本の写真に拠る。

(5) 陽明本孝子伝の本文は、幼学の会『孝子伝注解』(汲古書院、平成15年)に拠る。参考までに、船橋本孝子伝の本文を示せば、次の通りである。

郭巨者、河内人也。父無母存。供養勤々。於年不登、而人庶飢困。爰婦生一男。巨云、若養之者、恐有老養之妨。使母抱兒、共行山中、掘地將埋兒。底金一釜、々上題云、黃金一釜、天賜孝子郭巨。於是因兒獲金、不埋其兒。忽然得富貴、養母又不乏。天下聞之、俱譽孝道之至也。

なお孝子伝及び、陽明本、船橋本孝子伝については、注(3)前掲拙著 I 一、2を参照されたい。

(6) 図五は、寧夏固原博物館『固原北魏墓漆棺画』(寧夏人民出版社、一九八八年)に拠る(下は、同書の漆棺画線描図に拠る)。

(7) 二十四孝については、注(3)前掲拙著 I 二参照。なお当句、竜大本は、「人」を「民」に作る。日記故事系は、「奪」を「取」に、「人」を「民」に、「取」を「奪」に作る。孝行録系は、身延文庫本全相二十四孝詩選に同じ。

(8) また、(三)の類句は、蒙求引「郭巨將坑」注に引く、孝子伝にも見えている。その古注本の本文を示せば、次の通りである。

後漢郭巨家貧養老母。妻生一子。三歲。母常減食与之。巨謂妻曰、貧乏不能供給。共汝埋子。々可再有、母不可再得。妻不敢違。巨遂掘坑二尺余、忽見黃金一釜。釜上文云、天賜孝子郭巨。官不得奪、人不得取。出孝子伝(故宮博物院本)

(9) 敦煌本事森については、注(3)前掲拙著 I 一 3参照。

(10) 例えば句道興搜神記に見える、

句には、種々の形があつて、それらの主な異同を示せば、次の通りである。まず変文系断簡 S 三八九v は、第一句「奪」を、「侵」に作る。次いで、敦煌本北堂書鈔体甲は、第二句「私」を、「民」に作る(蒙求注へ古注、準古注、新注)は、「人」。敦煌本事森は、第二句「得取」を、「許侵」に作る(変文系断簡は、「許取」。敦煌本羸金は、「得侵」。二十四孝の当句の異同については、注(7)参照。

(11) 図七上は、『原州古墓集成』(文物出版社、一九九九年)図版18上に拠る。

(12) 図八は、『中国美術全集』絵画編1原始社会至南北朝絵画(人民美術出版社、一九八六年)図版一〇一(孝子図)に拠る。

(13) 図九は、寧夏固原博物館提供の写真に拠る。なお後掲注(35)を参照されたい。

(14) 図十は、呉強華氏恵投の拓本に拠る。

(15) 図十一は、注(12)前掲書、図版一〇一(孝子図)に拠る。

- (16) 図十二は、注(14)前掲の拓本に拠る。
- (17) 図十三は、和泉市久保惣記念美術館提供の写真に拠る。当石床については、『北魏棺床の研究 和泉市久保惣記念美術館 石像人物神獸図棺床研究』(和泉市久保惣記念美術館、平成18年)に詳しい。また、拙著『孝子伝図の研究』(汲古書院、平成19年) I二五参照。
- (18) 図十四は、注(14)前掲の拓本に拠る。
- (19) 仁井田陸『唐宋法律文書の研究』(東方文化学院東京研究所、昭和12年)三編二章に詳しい(東野治之氏教示)。
- (20) 西野貞治氏「陽明本孝子伝の性格並に清家本との関係について」、『人文研究』7・6、昭和31年7月。なお以下のことは、注(17)前掲拙著 I一、I二五において言及したことがある。
- (21) 例えば敦煌本北堂書鈔体甲に引く、「劉向孝子〔伝〕」は、破損が甚しいものの、行文が大幅に異なる。
- (22) 興味深いことに、漢代における郭巨の存在を疑い、「郭巨が後漢の人であるという伝承は孝堂山石祠が郭巨の墓とされた北斉以後に広まったのではあるまいか」とされる、橋本草子氏による、注目すべき仮説がある。詳しくは、同氏「郭巨」説話の成立をめぐる『野草』71、平成15年2月)を参照されたい。
- (23) 奥村伊九良氏「孝子伝石棺の刻画」(『瓜茄』4、昭和12年5月。後、同氏『古拙愁眉 支那美術史の諸相』へみすず書房、昭和57年)に再録
- (24) 奥村伊九良氏「鍍金孝子伝石棺の刻画に就て」(『瓜茄』5、昭和14年2月)。なおミネアポリス美術館蔵北魏石棺については、注(17)前掲拙著 I二四参照。
- (25) 長廣敏雄氏編『漢代画像の研究』(中央公論美術出版、昭和40年)二部「武梁石室画像の図象学的解説」
- (26) 長廣敏雄氏『六朝時代美術の研究』(美術出版社、昭和44年)
- (27) 西野氏注(20)前掲論文
- (28) 乾孔榮、羅豊氏「固原北魏墓漆棺の発現」(『美術研究』84・2、一九八四年5月)、王滝氏「固原漆棺彩画」(同)、固原県文物工作站「寧夏固原北魏墓清理簡報」(『文物』84・6)。なお漆棺画の復元について

ては、張莉氏「北魏墓漆棺の保護与修復」(『寧夏文物』90・4)に詳しい。

- (29) 注(6)前掲書
- (30) 当漆棺の舜図については、注(17)前掲拙著 II一参照。なお近稿「寧夏固原北魏墓漆棺画の孝子伝図」を予定する。
- (31) 三彩四孝塔式缶については、注(3)前掲拙著口絵及び、II三参照。また、唐代の孝子伝図に関しては、注(17)前掲拙著 I二五補記を参照されたい。
- (32) 和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床については、注(17)前掲書及び、注(17)前掲拙著 I二五参照。
- (33) 注(6)前掲書(8頁)など。
- (34) 奥村氏注(23)前掲論文(『瓜茄』鶯字第一、261頁)へ「古拙愁眉」、443頁)。なお、「The Nelson-Atkins Museum of Art, A Handbook of the Collection」(Hudson Hills Press, Inc. 1993)によれば、62.2×223.5 cmとあり(212頁)、その全長は、二二三・五釐となる。
- (35) 当漆棺の左側板の右(頭側)には現在、舜図に先立って、蔡順図一図が貼られているが、それは本来、右側板の右(足側)に描かれていたものと見たい。すると、図九の左に、二、三場面分のスペースが生じよう。なおその蔡順図は、模写もされず(注(28)前掲「寧夏固原北魏墓清理簡報」、50頁右)、線描図からも漏れていて、且つ、その図像は、公開されたことがない。当漆棺の孝子伝図には、幾つかのそのような図像が存することに、注意すべきである。
- (36) 図十五は、奥村氏注(23)前掲論文図版一に拠る。
- (37) 図十六は、呉強華氏貸与の拓本写真に拠る。注(1)参照。
- (38) 注(1)参照。なお董黯図については、注(17)前掲拙著 II一三参照。
- (39) このことは、注(30)前掲近稿において論じた。

(くろだ あきら 日本文学科)

二〇一三年十一月十三日受理